古河文化見聞録

日記が語る幕末・明治

諸川町組頭舘野重左衛門の日記

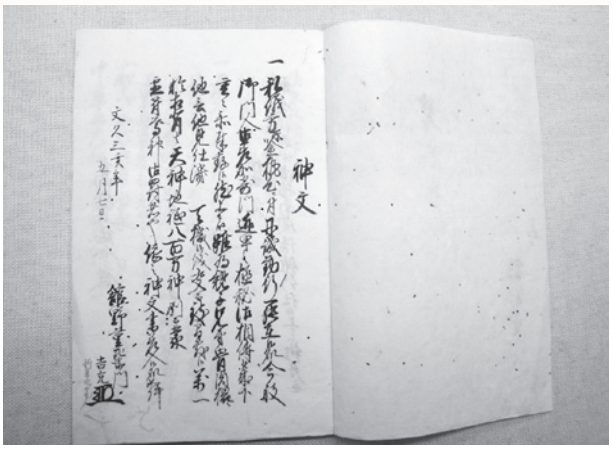
江戸時代、日光東街道の宿場町であった諸川町で、代々組頭を務めていた舘野家には、嘉永5(1852)年から明治2(1869)年までの18年間、幕末から明治にかけて記された日記が残っています(安政2年の日記だけが欠失)。

これらの日記は、幕末期に重左衛門を継いだ茂助の日記で、1年ごとに1冊にまとめられています。内容は、舘野家の日常の生活の様子が記されています。その日の天気、家族や奉公人たちの行動などが基本ですが、諸川町で起きた出来事なども時々記されています。

それでは、これらの日記の中を少しのぞいてみることにしましょう。

重左衛門「家相方位学」「砲術」を学ぶ

文久3(1863)年9月6日、諸川町名主中村三郎兵衛宅に昨日より沼森村(八千代町)の神官高橋上総介と菅谷村(八千代町)の元名主大久保七郎左衛門(七郎兵衛)が江戸に向かう途中に宿泊していました。重左衛門は三郎兵衛の勧めで、「家相方位学」を高橋上総介に、「砲術」を大久保七郎左衛門に入門することになり、それぞれ神文・誓文に血判を押して差し入れ、金百疋ずつを差し出しています。



▲家相炮術門入控

高橋上総介は土浦の国学者色川三中の門人で、家相方位学を修めていました。翌年3月の水戸藩尊王攘夷激派による筑波山挙兵(天狗党の乱)に父相模守と共に参加、軍資金集めに奔走し、下妻多宝院の夜襲に活躍しました。那珂湊の戦い以後、奥州に逃れて身を潜め、後に帰村して子弟の教育にあたりました。

大久保七郎左衛門も色川三中の門人で、号を真菅といい、嘉永6(1853)年6月にペリーが浦賀に来航すると、水戸藩の神発流砲術指南福地政次郎に入門し免許を取得しました。すでに菅谷村名主役は息子に譲っていました。翌年4月天狗党の乱に参加、大炮隊長兼武器奉行に任命され、以後行動を共にし転戦、9月に矢野下村(旧友部町)で自刃しました。

この日の入門の事実を裏付ける資料が残っています。「家相炮術門入控」で、重左衛門が高橋と大久保に差し入れた神文・誓文の控です。家相方位学の神文では極秘相伝の内容は親兄弟であっても他言他見しないことを神に誓っています。また、砲術の誓文は三カ条からなり、怠りなく修行に励むこと、公戦に用い私闘に用いないことのほかに、「海外之夷賊ヲ鏖ニシ……」とあり、攘夷思想を盛り込んだものでした。重左衛門がこの時40歳であったこともわかります。

家相方位学関係では、重左衛門が高橋から授与されたものと思われる「神殺明覧」があります。これは文久4(元治元・1864)年の方位吉凶図を表わした版本で、「土御門殿御直弟高橋上総介著」とあります。